

聖書に学ぶ経済学
-マルコによる福音書を中心に-
Learning from the Bible about Economics
- Mainly from the Gospel according to Mark -

山下 雅弘
Masahiro Yamashita

はじめに

神は「すべて」であり、「最大の組織」であると考えます。また、神は「視点の中心」であり、「外部の評価」であると考えます。

本文では、聖書を論理的、現実的に解釈し、経済に関係すると考えられる箇所を一部引用し、直後に解説しました。他の視点も取り入れます。人間教育や保健医療にも役立つことが幸いです。究極的には神のためになることが幸いです。

現代人は現代のルールを守るべきであり、差別には反対です。聖書の引用には、「新共同訳聖書」を用います。本稿は、マルコによる福音書を中心に扱います。

ガラテヤの信徒への手紙 1 章

- 1 人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ、
- 2 ならびに、わたしと一緒にいる兄弟一同から、ガラテヤ地方の諸教会へ。
- 3 わたしたちの父である神と、主イエス・キリストの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

パウロは、人から使徒にされたから宣教するのではなく、こうしなければならないと考えるからしていると考えます。パウロは、人を迫害していたからかもしれません。

わたしたちにも人に委ねることが適切な場合もありますが、こうするしかないというときには、人に決めてもらわなくてもできますしやるしかありません。

生活していく中でやるべきことが変わってくることがあります。

フィリピの信徒への手紙 3 章

- 5 わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、
- 6 熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。

7しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。

8そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。

(中略)

13兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、

14神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることで

(中略)

16いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。

パウロは当時の人から選ばれた超エリートでした。きまりなども完璧に守っていたようです。しかし、それ故に慢心し人を否定してきました。業績が優れていることは重要ですが、人を救うためのものです。周囲に対する思いやりが大切です。イエスの教えは広く適用可能で少ない教えを広く応用するように導く教え方です。また、分かりやすいです。

パウロは回心後、少なくともお金だけが素晴らしいとは考えていません。目標を変え同じ状況に望む方がかえって経済が充実することも考えられます。資格取得は重要ですが、教養が良い仕事を支え生み出します。

「到達したところに基づいて」新しく生きることが重要です。過去が適切ならその方向で、望ましくないなら転換して生きるべきです。

コリントの信徒への手紙 — 13章

2たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。

多く知識を持っていましても愛がなければ何の値うちもないようです。何をするにも愛が必要です。

マルコによる福音書 1章

1 神の子イエス・キリストの福音の初め。

イエスは後に自分のことを「人の子」と言っていますように人間ですが普通の人とは違います。

情報収集は大切です。遅れると役に立たないことがあります。しかし、良い情報はすぐに取りろうとするから得られないこともあります。なかなか手に入らないものもあります。過去の状況に関するもののみである場合もあります。今できることをし、新しい状況を切り開いていく方が望ましい場合もあります。意見を戦わせること自体に価値がある場合もありその中で良い情報が生み出されることもあります。良い情報は様々な過程を経て得られます。様々な情報を良いものにし伝えていくことが重要で永く残る情報があります。

マルコによる福音書 1 章 イエス、洗礼を受ける (マタ3 13-17、ルカ3 21-22)

9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。
10 水の中から上がるとすぐ、天が裂けて、霊が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。
11 すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

イエスは自分も素直に新しくなってから教え始めています。そのことも含めて望ましいと考えます。わたしたちも自分の価値観を大きく転換させられた教えは人々に伝えますと特に相手の心に響くのかもかもしれません。自分も常に新しくなりながら教える方法もあります。

こちらが正しいと明らかなことは正しい方向を見定めなければなりません。第一歩目が適切な方を向いていることが大切です。

悩むことが適切な場合もありますし、方向転換が必要な場合もあります。意見を二分して協議することの方が結論を急ぐことより適切である場合も考えられます。答えのない問題に向き合わなければならないこともあります。祈りの具現化の一つです。必ず正解があるとは限りません。

また、心配の種が心に浮かびましたら早めに摘み取ることが望ましいです。問題は小さいうちに解決することが望ましいです。

マルコによる福音書 1 章 誘惑を受ける (マタ4 1-11、ルカ4 1-13)

12 それから、霊はイエスを荒れ野に送り出した。
13 イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。

人は不適切な方に誘惑されましても、踏みとどまらなければなりません。

マルコによる福音書 1 章 ガリラヤで伝道始める (マタ4 12-17、ルカ4 14-15)

14 ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、
15 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

宣べ伝えることは悔い改めてもらうことに繋げるべきで内容が重要であると考えます。バランスを保とうとすることが大切です。

切羽詰りますと一つの事に専念できます。自分が本当に何を求めているか明確になり積極的になることができます。願い事を一つだけにする、すなわち第一希望として今求めることを自身で確認しますと、今なすべきことが明確になり叶いやすくなると考えます。こうするしかないという決断ができます。

その時々と言動や努力の、方法や方向性を見直す必要がある場合があります。どの時点においてもその時にしかできないことをしなければならぬと考えます。今、ここに集中しなければなりません。

マルコによる福音書 1 章 汚れた霊に取りつかれた男をいやす (ルカ4 31-37)

21 一行はカファルナウムに着いた。イエスは、安息日に会堂に入って教え始められた。

22人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。

23そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。

24「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」

25イエスが、「黙れ。この人から出て行け」とお叱りになると、

26汚れた霊はその人にけいれんを起こさせ、大声をあげて出て行った。

27人々は皆驚いて、論じ合った。「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」

28イエスの評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々にまで広まった。

どうせ自分は悪いから滅ぼされると思っている人に対して、きまりに反しているから正しなさいと教えるだけでなく、上手に説得して改心させる方法もあると考えます。

規則を作り教えるだけでなく、人間に災いをもたらす部分を取り除く教え方ができることが望ましいです。

律法学者は必ずしも最高の存在であると考えられているわけではありません。

マルコによる福音書 1 章

29すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。

30シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。

31イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。

31節のようなことは実際に起こるとは考えられませんが、「イエスがそばに行き、手を取って起こされる」ことによって、シモンのしゅうとめは病気が治る以上の効用を与えられたと考えます。病気になる前の日々の積み重ねも大切です。人はいやされますと悪い言葉を発しなくなります。

この方と居るとなぜか良くなります。わたしたちもお互いそのようであることが望ましいです。

マルコによる福音書 1 章 重い皮膚病を患っている人をいやす (マタ8 1-4、ルカ5 12-16)

40さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。

41イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、

42たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。

43イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、

44言われた。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。」

45しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のない所におわれた。それでも、人々は四方からイエスのところに集まって来た。

実際に重い皮膚病がすぐに治るとは考えられませんが、しかし、「重い皮膚病を患っている人が、イエスのところ

に来てひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。」ことが清いことです。病気を治療しようとするとともに、他にも何かできないか考え、復帰させようとすることによって実際に治る以上の効用を与えることができると考えます。心がいやされます。イエスの活躍は始まったばかりです。病気をいやすだけではありません。

平安時代、日本国中に疫病が流行し多数の死者が出たとき、嵯峨天皇は深く心を痛められ、弘法大師の上奏により、一字三礼の誠を尽くし般若心経一巻を浄書されたところ、たちまち疫病はおさまったと言われています。(旧嵯峨御所大覚寺パンフレット参考)。急に疫病がおさまったとは考えにくいことですが、深く心を痛められたことが民衆にいやしを与えたと考えます。深く心を痛められたという点が似ています。

実現するかしないかにかかわらず、概念を創ることによって、現在の評価以上の価値を生み出すことができると考えます。

マルコによる福音書2章 中風の人をいやす (マタ9 1-8、ルカ5 17-26)

- 1 数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、
- 2 大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、
- 3 四人の男が中風の人を運んできた。
- 4 しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかつたので、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。
- 5 イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。
- 6 ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれと考えた。
- 7 「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」
- 8 イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。」
- 9 中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。
- 10 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われた。
- 11 「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」
- 12 その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見ている前を出て行った。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って、神を賛美した。

この中風の人にはイエスのもとまで運んでくれる仲間がいます。四人の男が必死になってくれています。イエスのもとへ連れて行けば適切に導いてくれるという信頼があります。

ここでは中風が治ったとは述べられていません。四人の男によってこの中風の人の心がいやされます。イエスは、病気を罪のためとばかり考えなくてもよいと導いたと考えます。病気であることは良くないと考えて失望してしまいます。しかし、支えてくれる周囲に感謝し病気を担って歩めば道は開けると考えます。

マルコによる福音書2章

17 イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正

しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

イエスは自分のことを医者に似た存在であることを述べています。

マルコによる福音書2章

18ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人々は、断食していた。そこで、人々はイエスのところに来て言った。「ヨハネの弟子たちとファリサイ派の弟子たちは断食しているのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか。」

19イエスは言われた。「花婿と一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか。花婿と一緒にいるかぎり、断食はできない。

20しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その日には、彼らは断食することになる。

努力すること、頑張ることは大切です。しかし、その場、その時にふさわしくない事をしますと無駄になったり損失が出たりすることがあります。損をさせたり嫌な思いをさせる頑張りは良くありません。その場、その時に適合したことをしなければなりません。

人は適度に競争することによって成長します。競争するべき時はする、協力するべき時はするべきです。また、競争しながら協力する、協力しながら競争することも考えられます。

マルコによる福音書3章 手の萎えた人をいやす (マタ12 9-14、ルカ6 6-11)

1 イエスはまた会堂にお入りになった。そこに片手の萎えた人がいた。

2 人々はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、注目していた。

3 イエスは手の萎えた人に、「真ん中に立ちなさい」と言われた。

4 そして人々にこう言われた。「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」彼らは黙っていた。

5 そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。伸ばすと、手は元どおりになった。

6 ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。

このような状況で手の萎えた人が実際に急に元どおりになったとは考えられませんが、安息日に、自分は隅にいないといけなと思っていたかもしれないこの人を真ん中に立たせ助けようとすることによってこの人の心がすぐによされたと考えます。

規則を守ることは重要です。そこに愛のある言動を加えられることが幸いです。規則や習慣を永遠に絶対視しますと、それによって問題が生じる場合、問題点が解決されなまま残ることがあります。自由な奉仕をすることによってより重労働になり厚生が高まることがあります。現代でも休日に人助けをしてももちろん問題はありません。

マルコによる福音書3章 十二人を選ぶ (マタ10 1-4、ルカ6 12-16)

13 イエスが山に登って、これと思う人々を呼び寄せられると、彼らはそばに集まって来た。

14そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、
15悪霊を追い出す権能を持たせるためであった。

16こうして十二人を任命された。シモンにはペトロという名を付けられた。

17ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルゲス、すなわち、「雷の子ら」という名を付けられた。

18アンデレ、フィリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルファイの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、

19それに、イスカリオテのユダ。このユダがイエスを裏切ったのである。

どの弟子も世間の人々からは必ずしも素晴らしいと思われていた人々ではないかもしれません。すべての個性はバランスに欠ける存在です。しかし、神には愛されていると考え、相性の良い人同士うまく組み合わせることによって成果が違ってくると考えます。それは世間から優れていると言われる人々にも当てはまると考えます。イエスは異なる強い個性を選び、組み合わせて生かそうとしました。

マルコによる福音書 3章

23そこで、イエスは彼ら呼び寄せて、たとえを用いて語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。

悪気で悪いものを追い出すことは困難であると考えます。悪い流れを良いものに転換していくことが必要です。

『ダンマ・パタ（法句経）』第一品五で同様のことが示されていると考えます。怨みは怨みによっては鎮まりません。怨みを消し去ってこそ鎮まります。

マルコによる福音書 3章

29しかし、聖霊を冒瀆する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。」

聖霊に従って生きることが重要であるようです。聖霊に従った言動を非難してはいけないようです。イエスの教えを学んだ上でわたしたちがこうしようという直感が一つの聖霊の働きであると考えます。

マルコによる福音書 4章

20良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶのである。」

20節に「御言葉を聞いて受け入れる人たち」とあります。御言葉を聞いて受け入れ悟ることが重要です。30節から32節の「からし種」のたとえと同様のことを教わります。富などを中心に据えて追求しなくても、御言葉を聞いて受け入れますと大きな実を結ぶと考えます。御言葉はすぐに三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶとは限りませんが、時間を経て大きな成果に繋がると考えます。わたしたちの教えもこのようにあることが望ましいです。

マルコによる福音書 4章

24また、彼らに言われた。「何を聞いているかに注意なさい。あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にと

くさん与えられる。

意味を吟味しながら聞き、受け入れ生かすことができますと、他人の尺度ではなく、自分の中で自分なりに豊かに幸せになることができます。それを続けると、ますます豊かになることができると考えます。たとえを用いて話すのは、聞き手に考えてもらう教え方です。

マルコによる福音書4章 「成長する種」のたとえ

26また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、
27夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。
28土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。
29実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

ここで言われています神の国は、最初の原因がなぜ成長に繋がるのかわかりません。短期間に、原因を作った人の力だけではなく、長い期間を経て神の力と共にひとりでに収穫の時に近づくようです。人の力だけで成長するではありません。

こうすれば成長するという、人の力だけで描いた成功シナリオは、うまくいくかもしれませんがもううまくいかないかもしれません。成功シナリオは永続するとは限りません。

GDPや経済成長率のように数値では測れないかもしれませんが、恐れや信仰を知ることも人間の成長です。数字だけでは表現できない事柄があるかもしれません。

マルコによる福音書4章 「からし種」のたとえ（マタ13 31-32、ルカ13 18-19）

30更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。
31それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、
32蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

ここで言われています神の国では、蒔くときはごく小さなものでも、成長すると大きくなり、大きなお返しになって返ってきます。人と人との繋がりにおいて、小さくても報いを与えようと思ってもらえる何かを持つことが望ましいです。

わたしたちの日々は小さな言動の積み重ねによって成り立っています。それらが適切であることが重要です。徳を積むことが大切です。

マルコによる福音書4章

37激しい突風が起り、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。
38しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。
39イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり風になった。

このような状況で激しい突風に遭遇しますと恐れます。39節のようなことは実際には考えられません。このような状況に遭遇しないようできる限り警戒しなければなりません。しかし、この場合は皆が助かりました。

わたしたちには恐れるべきことを認識し直すべき時があると考えます。良くなることを信じて進まなければならない時もあります。どんな困難もいつか過ぎ去ると信じ向き合うことが重要です。また、本当は困難ではないこともあるかもしれません。

マルコによる福音書5章 悪霊に取りつかれたゲラサの人をいやす (マタ8 28-34、ルカ8 26-39)

- 1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。
- 2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。
- 3 この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。
- 4 これまでも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。
- 5 彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。
- 6 イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、
- 7 大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」
- 8 イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。
- 9 そこで、イエスが、「名は何と言うのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。
- 10 そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。
- 11 ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。
- 12 汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。
- 13 イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。
- 14 豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。
- 15 彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。
- 16 成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語った。
- 17 そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いだした。
- 18 イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。
- 19 イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」
- 20 その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。

この悪霊に取りつかれたゲラサの人が墓場に住むということは、家から追い出されたのかもしれませんが。きまりは守らなければなりません。しかし、否定される数が多いために苦しめられる人もいるかもしれません。忠告が多く細分化され過ぎていることもあるかもしれません。多くのことを思いますとすることも増えます。大勢の人と比較し努力しても良くならないと、周囲を責め、自分を責め不安で落ち着かなくなることもあります。何重にも支配

される人がいたかもしれません。すべてを聞き入れていますと大変かもしれませんし、本当に大切なことはそう多くないかもしれません。でもこの人はこの地方に居たいようです。そのような時、さらに構うより、それらの忠告を一旦捨て、自分が納得できることから受け入れなさいと言う方が良くなるかもしれません。自分らしく生きられます。他人と比較しなくても自分のことを決められるようになります。他人は自分と同じでないダメという考えも少なくなります。批判の多い集団、自分のない人の集団は、滅びに向かうのではないのでしょうか。自己を確立し、自分の人生を生きることが大切です。

イエスのところに来ると正気になったとのこと。神のような人と共にいますと心配でなくなるようです。身内の人もそのように接することができるようになれば望ましいです。この人がいやされ、次にその家庭が、その次にこの地方が改善されます。自分を大切に自分らしく生きることを促すことがいやしであると考えます。

マルコによる福音書 5章

25さて、ここに十二年間も出血の止まらない女がいた。

26多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。

27イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。

28「この方の服にでも触れればいやしていただける」と思ったからである。

29すると、すぐ出血が全く止まって病気がいやされたことを体を感じた。

このような状況ですぐに出血が全く止まるとは考えられませんが、ここでは「多くの医者」の治療能力とは別の力があることが述べられていると考えます。現代の医学は発達しています。マルコによる福音書が書かれた時代の医者は現代とは全く違っていたかもしれません。医者は有難く、病気を治療することができます。医療技術が高度に発達すればひどく悪化した病気でも治療できます。

しかし、病気が悪化するまでの健康に生きられる生活を充実させることも大切です。医者は患者を助ける方々です。食事や睡眠、適度な運動などが健康を促します。自然治癒力が病気を治します。普段から医者以上のいやしを与えることを考えられることは幸いです。また、もし亡くなられていく方がおられましたら、それまでの過程を、希望を持って生きて頂くようにしなければなりません。

いやしや支え合いも含めて保健医療であると考えられることもできます。

マルコによる福音書 5章

30イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、「わたしの服に触れたのはだれか」と言われた。

しんどい思いを人にさせる人には、救いが必要である場合があると考えます。

マルコによる福音書 5章

35イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」

36 イエスはその話をそばで聞いて、「恐れることはない。ただ信じなさい」と会堂長に言われた。

37 そして、ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて来ることをお許しにならなかった。

38 一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、

39 家の中に入り、人々に言われた。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。」

40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた。

41 そして、子供の手を取って、「タリタ、クム」と言われた。これは、「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」という意味である。

42 少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。

43 イエスはこのことをだれにも知らせないようにと厳しく命じ、また、食べ物少女に与えるようにと言われた。

亡くなった人が実際に生き返るとは考えられません。しかし、わたしたちにはもう終わりだという状況の先に踏み込んで行く必要がある場合はあると考えます。何かが起こる可能性が生まれます。

終わりだと思いう時でも、続きがあると思いうべきであることや希望を持ち歩み続けることの大切さを教えていると考えます。

マルコによる福音書 6 章

4 イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。

普段から一緒にいる人には案外敬われないことがあるかもしれません。普段一緒にいるために自分たちと同じ考えを持っていて十分理解できていると思われてしまうこともあるかもしれません。

改めて身近な人を理解し直そうとする機会も必要かもしれません。身近な人こそ見直し、また自分のことも理解してもらえることが望ましいです。

また、共感できる人と付き合うことも必要です。あまりこだわらず次に進むのも良いかもしれません。

マルコによる福音書 6 章 十二人を派遣する (マタ10 1、5-15、ルカ9 1-6)

それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。

7 そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、

8 旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、

9 ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。

10 また、こうも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、この土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。

11 しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようもしない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落としなさい。」

12 十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。

13 そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。

十二人を二人ずつ組にして遣わしますと多くの所に教えが届きますが、二人組ということは、弟子たちは一人にしか頼ることができません。

余分なものを持たず、贅沢をせず、生活に必要な物がぎりぎりあれば十分と考えて派遣しています。いやしを与えるためには余分な物を持たないことが必要であることもありますが。

マルコによる福音書 6 章

21ところが、良い機会が訪れた。ヘロデが、自分の誕生日の祝いに高官や将校、ガリラヤの有力者などを招いて宴会を催すと、

22ヘロディアの娘が入って来て踊りをおどり、ヘロデとその客を喜ばせた。そこで、王は少女に、「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前にやろう」と言い、

23更に、「お前が願うなら、この国の半分でもやろう」と固く誓ったのである。

24少女が座を外して、母親に、「何を願いましょうか」と言うと、母親は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。

25早速、少女は大急ぎで王のところに行き、「今すぐに洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」と願った。

26王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、少女の願いを退けたくなかった。

27そこで、王は衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るようにと命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、

28盆に載せて持って来て少女に渡し、少女はそれを母親に渡した。

29ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、やって来て、遺体を引き取り、墓に納めた。

ヘロデ王は、自らの誕生日を祝う時に油断して不用意な発言をしたようです。首をはねるのは非常に悲しい結果です。ヘロデ王の独断です。欲しい物は何でもやろうとは言わない方が良いです。思っている以上の物を奪われる恐れがあります。誓いを破ってでもヘロディアの要求を断っていたらヨハネの命は助かりました。権力もどこかで歯止めをかけなければ危険な方へ向かうことがあります。多くの財産を獲得しそれを配分できるようになっても問題が生じています。十分余裕がある状態の次に好ましい出来事は起こりませんでした。有り余る財産を持っていますと、適切な判断ができなくなるかもしれません。国全体から見れば裕福でもすべての人が満足しているとは限りません。何でもできるという所から発展は始まらないと考えます。富を多く持ちさえすれば効用が大きいとは限りませんでした。

最初に一人に大きな富と権力が集中しています。一人が全権を所有し全員を一度に幸せにしようとしますと、結果として誰も幸せにならないことがあると考えます。その時々やり方が一通りしかないからです。組織が崩れていくことがあります。民間の黒字を急に吸い取るわけにもいきません。

必要以上に富や権力をもちますと、自分には何でもできると思ってしまいがちです。その驕りが不幸に繋がる場合があります。いつの間にか負債を抱える場合もあり得ます。金銭感覚は重要です。しかし、企業が投資をするためには借入れが必要な場合もあります。

十分に富を蓄え、財を買い揃えてしまいますと交換が減り不景気になります。必死になる時には高慢になる余裕はありません。

マルコによる福音書6章 五千人に食べ物を与える（マタ14 13-21、ルカ9 10-17、ヨハ6 1-14）

30さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。

31イエスは、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。

32そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行った。

33ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。

34イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。

35そのうち、時もだいぶたったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、時間もだいぶたちました。

36人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買って行くでしょう。」

37これに対してイエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。弟子たちは、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。

38イエスは言われた。「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」弟子たちは確かめて来て、言った。「五つあります。それに魚が二匹です。」

39そこで、イエスは弟子たちに、皆を組に分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった。

40人々は、百人、五十人ずつまとまって腰を下ろした。

41イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。

42すべての人が食べて満腹した。

43そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。

44パンを食べた人は男が五千人であった。

実際に五つのパンと二匹の魚が、急に五千人分以上に増えるとは考えられません。五千人が実際の目標値ではなかったかもしれません。実際には、五つのパンと二匹の魚を少数の人々に分けたと考えます。少ない食べ物を分けて食べられる大きな喜びがあります。イエスは少量の食べ物に感謝し分配することが弟子たちにできるか試されたのかもしれません。近くにいる人に価値を与えることが好循環を生みます。近くの人を愛することができることは幸いです。

それぐらいでは少ない、何もできないと考えることがあります。しかし、少量でも与えられた物を生かしますと状況が変化していきます。たとえ少しでも適切な方を向いている事柄は推進するべきです。祈りは、すぐに解決しないで状況を変化させることです。多くの人を養えるほど豊かになることができるかどうかは、任意の個人の、一歩目から始まる思考や言動によると考えます。たったそれだけでは全く足りない、役に立たないよということと、肯定的に言うこととはその後の展開と成果が違うと考えます。

五つのパンと二匹の魚は一食の一人分か二人分です。一人が満たされ、次に二人、・・・、五十人、百人、五千人分の効用に（動学的に）増えていくという考え方は、一人の事情から考慮することの大切さが示されていると考

えます。大きな成果も一人のその場その時の思考、言動から始まると考えます。全体として見ますと、「五つのパンと二匹の魚」では全く足りないと考えられますが、たとえかけ離れていても、なすべきことは、早期に適切な方へ歩み出すことです。小さいことさえすれば十分ではありませんが、適切な一歩目が小さいといけないというわけではありません。小さい一歩からしか踏み出すことができなくても適切な方へ踏み出すべきです。次の段階を無事に迎えることができます。豪華な物を余るほど持っていますと、勤労意欲が減少し、交流の必要もなくなります。豪華でなくても財の行き渡り方とその過程に幸いがあります。地道に行くことも大切です。多くの人の権利を独占することと、複数の人に権利を分けることとは正反対です。

五つのパンと二匹の魚を分けようとする状況では慢心がありません。富を二人分、三人分、四人分、・・・と独占しますと他人の分がなくなる恐れがあります。その逆は、富を二分の一、三分の一、四分の一、・・・に分ける心構えです。一つの物を分け合って食べますと仲が深まります。心を通わせることができます。組織ができます。小さな交換から好景気が生まれ発展することが考えられます。

一人の言動が国を動かすと考えます。選挙においても一票は大切です。大学を作るのは学生の関心と家計の運営からであると考えます。最初に大勢集まるのが大切なのではないと考えます。一挙に大勢を教えることと一人から教えることとは正反対です。一人が何でも分かると考えるだけでなく、実際に解決は困難でも一人の問題に寄り添うことが重要であると考えます。同じ利得をお互いに得ることを繰り返すことが最高の利得に繋がると考えます。「あなたがたが」一歩を踏み出す、これがミクロ経済学の視点です。

ここでは、マルコによる福音書6章30節～44節と大仏造立の詔と共通している点について述べます。

大仏造立の詔

日本では、天平15年（743）に大仏造立の詔が出されました。

「朕薄徳を以て恭しく大位を承け、中略 誠に三宝の威霊に頼りて乾坤相ひ泰かにし、万代の福業を脩めて動植咸く榮えむとす。中略

夫れ、天下の富を有つは朕なり。天下の勢を有つは朕なり。この富と勢とを以てこの尊き像を造らむ。事成り易く、心至り難し。中略

如し更に人有りて一枝の草一把の土を持ちて像を助け造らむと情に願はば、恣に聴せ。」

動植物を含めすべての存在がよくなることを考えられることは幸いです。

権力者である聖武天皇が権力を動員して命令で造らせることはできます。しかし、それでは物はできて心もありません。多くの人々の力で造らないと意味がないという意味です。多くの人々の力で造るから多くの人々のための物になります。このプロジェクトを少しでも手伝いたいという人がいたら受け入れよという意味もあります。

政府や皇室だけで行おうとしているのではなく、多くの人々で造ったことを見える形にした物が大仏です。多くの人々が少しでも参加したいと思える、また参加できる大型プロジェクトでした。日本が一つになっていたようです。

日本の財政赤字も世界の評価を受けます。政府の支出が増え、好循環が起らなくなることがあります。小さな支出が大きな赤字に繋がることもあります。補助は黒字やストックのある所からするのが基本です。費用を最小に抑え効果を上げなければなりません。所得や消費をいくらでも海外に移転させてよいわけではありません。少しの

節約を積み重ねることも重要です。経済学におきましても、この人を救いたいという情熱が大切です。「一枝の草いっし くさ 一把の土ひじ」で急に巨大な大仏が完成するわけではありませんが、たとえわずかでも、人心が適切な方を向いていることが大切です。個人が貨幣を得ることだけを考えますと、組織に貨幣が残らなくなることがあると考えます。

富や権力があれば自分たちは何でもできると思っても明確な根拠はありません。富や権力を持っていても政変や、飢饉、大地震、当時流行したという疫病などを抑えることは困難でした。反対に、そんな小さなものでは全く足りない、役に立たないと言ってしまうと前進しない場合があります。小さな節約でも「わたしたちがやらなければならない」と考えるべきです。

このままでは役に立たなくても、そのままの状態を受け入れそこに基づいて、適切な方へ向けて歩み出すことが大切です。

マルコによる福音書6章

49弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。

50皆はイエスを見ておびえたのである。しかし、イエスはすぐ彼らと話し始めて、「安心なさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。

51イエスが舟に乗り込まれると、風は静まり、弟子たちは心の中で非常に驚いた。

実際に人が湖の上を歩けるとは考えられません。しかし、既存の科学だけでは理解できない事柄があると考えられることは可能です。

苦しい状況でも誰かが平気でいて安心感を与えることが必要かもしれません。

マルコによる福音書7章

5そこで、ファリサイ派の人々と律法学者たちが尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか。」

手を洗ってから食事をするのは良いことです。昔の人から受け継いだ教えとして否定されるわけではありません。しかし、習慣や規則などを守りさえすれば心がなくても構わないと考えますと、家庭や社会を作り上げていく上では十分ではありません。もっと重要なことがあります。

良い心で満たすことが大切です。

マルコによる福音書7章

20更に、次のように言われた。「人から出て来るものこそ、人を汚す。

人は自分より周囲が不浄であると考えることがあるかもしれません。しかし、人の中から出るものは清浄ではなく不浄であると考えべきであるようです。わたしたちは、せめて心と言動に気を付けなければなりません。

マルコによる福音書7章

26女はギリシア人でシリア・フェニキアの生まれであったが、娘から悪霊を追い出してくださいと頼んだ。

27イエスは言われた。「まず、子供たちに十分食べさせなければならない。子供たちのパンを取って、小犬にやっ
はいけない。」

28ところが、女は答えて言った。「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます。」

29そこで、イエスは言われた。「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てし
まった。」

30女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。

犬にばかりパンをやって、娘に食べ物を与えないのではもちろんいけません、親が徳を積むことにより子が良
い方に変わることはあり得ることです。

マルコによる福音書 7章 耳が聞こえず舌の回らない人をいやす

31それからまた、イエスはティルスの方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやっ
来られた。

32人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った。

33そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に
触れられた。

34そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、「エツファタ」と言われた。これは、「開け」という意味
である。

35すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった。

36イエスは人々に、だれにもこのことを話してはいけない、と口止めをされた。しかし、イエスが口止めをされれ
ばされるほど、人々はかえってますます言い広めた。

37そして、すっかり驚いて言った。「この方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるよ
うにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる。」

多くの人から一方的に忠告され過ぎますと自分の考えや感情が話しにくくなるのかもしれませんが。否定や批判ば
かりされていますと、心を閉ざしコミュニケーションを取りにくくなると考えます。話を聞きたくない、聞けない、
話したくない、話せない人に対して、「心を開いて話してごらん」と言って話を聞くことからコミュニケーションが
始まることがあります。まず「話を聞け！」と言うことと相手の「話を聞く」ことが正反対になっています。

抑圧せず、まず話を最後まで聞き、受け入れ、それから話すことによって人は心を開きます。心を開きますと、
こちらの話も聞けるようになり、自分の考えや感情をはっきり表現できるようになり、心からコミュニ
ケーションが取れるようになります。心を開いてもらう秘訣はまず聞くことであると考えます。まず聞けるよう
になれば上手に話せるようになります。

一人の人の転換に目を向けるべきです。

マルコによる福音書 8章

6そこで、イエスは地面に座るように群衆に命じ、七つのパンを取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き、人々に配
るようにと弟子たちにお渡しになった。弟子たちは群衆に配った。

7 また、小さい魚が少しあったので、賛美の祈りを唱えて、それも配るようにと言われた。

8 人々は食べて満腹したが、残ったパンの屑を集めると、七籠になった。

9 およそ四千人の人がいた。イエスは彼らを解散させられた。

たとえわずかであっても正しい方を向いていますと、大きな成果に向かいます。

十分にある富を分配することも重要ですが、少ない富を人々に分けるような分配がむしろ祝福され発展に繋がると考えます。

マルコによる福音書 8 章 人々はしるしを欲しがる (マタ16 1-4)

11 ファリサイ派の人々が来て、イエスを試そうとして、天からのしるしを求め、議論をしかけた。

12 イエスは、心の中で深く嘆いて言われた。「どうして、今の時代の者たちはしるしを欲しがるといふのだらう。はっきり言うておく。今の時代の者たちには、決してしるしは与えられない。」

13 そして、彼らをそのままにして、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。

他人を試そうとしてはいけないことがあると考えます。また、試そうとしているとき奇跡は起こらないと考えます。

何かを必死で求めるとき転換が起こると考えます。

マルコによる福音書 8 章 ベトサイダで盲人をいやす

22 一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願った。

23 イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。

24 すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります。」

25 そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった。

26 イエスは、「この村に入ってはいけない」と言って、その人を家に帰された。

この盲人は生まれつきの盲人ではありません。イエスが「村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその上に置」くと、少し見えるようになったとのこと。二段階で「何でもはっきり見えるようになった」とのことです。このようなことは実際に起こるとは考えられません。しかし、わたしたちは、ある場や組織の中にずっといますと見えないことがあるかもしれません。外側に出ますと少しずつ見えてくることもあるかもしれません。

マルコによる福音書 8 章

35 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。

自分を守ろうとするばかりでは守れなくなることがあると考えます。自分の現状を守りたいと思うから次の展開

が来ず、新しくなろうとするから発展することがあります。自分を生かしたいと思うなら、自分を押し殺さなければならぬこともあります。

マルコによる福音書 9 章

2六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、

3服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。

イエスの話を聞いて、弟子たちはまだはっきりとはわかりませんが、エリヤやモーセと似てはいるがイエスだけは少し違うと感じ始めたのかもしれない。

マルコによる福音書 9 章

28イエスが家の中に入られると、弟子たちはひそかに、「なぜ、わたしたちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねた。

29イエスは、「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」と言われた。

議論だけでは解決できないことがあります。憐れみ、共感できなければなりませんし、祈り続ける過程に答えがあることがあります。その過程が良い結果である場合もあります。

ある特定のことができますと安心してしまい、信仰から遠ざかってしまうかもしれません。できないと思いつけるから信仰も続くと考えます。できないと思うから勉強も続きます。できないことがあると思えるぐらいが適切かもしれません。

汚れた霊を追い出すとは、特定の悪事をその時だけやめさせるだけでなく、他の悪事も含め継続的に起こす気をなくさせることであると考えます。

祈りの意義を現実に応用することが大切です。

マルコによる福音書 9 章

35イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」

一番高い地位にいたい人は、あまり贅沢をしない方が支持されるかもしれません。

マルコによる福音書 9 章

40わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。

イエスたちに逆らわない程度の信仰でも十分であると考えます。その程度のこと大切であると考えます。

マルコによる福音書9章

41ははっきり言うておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける。」

わたしたちには一杯の水を出してくれると大変助かることがあります。

マルコによる福音書10章

9従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」

神の御心に適う祝福された心や言動の積み重ねが良い縁を引き寄せると考えます。人と人とは縁があれば一緒にいますし、なければ離れていきます。

結婚や離婚は十分対話してからしなければならぬと考えます。広い視野からよく考えなければなりません。

ヨハネによる福音書2章 カナでの婚礼

1三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、イエスの母がそこにいた。

2イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。

3ぶどう酒が足りなくなつたので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。

4イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」

5しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。

6そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあつた。いずれも二ないし三メートル入りのものである。

7イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。

8イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。

9世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかつたので、花婿を呼んで、

10言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわつたところに劣つたものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取つて置かれました。」

11イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行つて、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

12この後、イエスは母、兄弟、弟子たちとカファルナウムに下つて行き、そこに幾日か滞在された。

このような状況で実際に水がぶどう酒に変わるとは考えられません。どのような教えであるのかについて考えます。イエスの働きはまだこれからです。

加工された製品は付加価値を生み出します。ぶどう酒は経済財で価値は高いです。しかし、水は生活に必要不可欠です。最後に最も有難いのは水をやり取りするようなことです。愛はわたしたちの命にかかわることです。大きな成果と言われることさえそのようなことの積み重ねによると考えます。それができるようになることが幸いです。

特別なことをしようとする以上に大切なことがあります。水はかつて自由財でした。しかし、環境汚染などにより水も経済財になりつつあります。市場で取引され、GDPに含まれる経済財が増えましてもそれ以上に環境汚染が進みますと必ずしも経済が発展しているとは言えないことも考えられます。

わたしたちが求めているものは、太陽や水などによってもたらされます。当然のように与えられるものが奇跡を呼ぶ、また奇跡そのものであるかもしれません。天から与えられる水に価値があります。自分たちが仕事をして得たつもりの財やサービスの大部分は既に与えられているとも考えられます。わたしたちが追い求めている「付加価値の高い財やサービス」はもう得られているかもしれません。既にあるものの中に幸せを見出したり再発見することも大切です。

個人間の毎回の関係において、お互いに小さくても必要不可欠な利得を与え合う関係を続けていくことが長期的には最適であると考えます。また、様々な場面で役立つ純粋な教えは残ると考えます。荘子の「君子の交わりは淡きこと水の若く、小人の交わりは甘きこと體のごとし」と似ている部分があると考えます。

結婚生活は、若い間は普通でも年齢を重ねて最高のパートナーに到達することが望ましいと考えます。生活と仕事に繋がるのが望ましいです。無償の愛をやり取りできることが好ましいです。どなたとどなたが組まれるかが重要です。

必要不可欠なことをあっさりし続けることがいつしか最高の価値に変わると信じます。

マルコによる福音書10章

15はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

幼子を見るもの聞くことが新しいことばかりです。新しい眼や耳を持っています。新しさは弱さや素直さから始まるのかもしれませんが。また、幼子は諦めや傲慢が少ない存在です。

大人が上で子供が下という考えは正しいですが、このような見方を少し変えると変わる部分もあります。それぞれの学年での教育が最高到達点であると考えられます。それが子供と子供の時に学ぶことを大切にすることも繋がります。小学校の内容は小学校時代に、中学校の内容は中学校時代に修得させることが重要です。

マルコによる福音書10章

17イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」

18イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。

19『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」

20すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。

21イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」

22その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさん財産を持っていたからである。

23イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」

人生のどの時点も通過点と考えず、到達点と考えるのも良いと考えます。金持ちになるまでのプロセスが犠牲に

なることもあります。「神の国に入る」とは、プロセスを充実させることでもあると考えます。

お金を十分持っていますと、必死になれない場合があると考えます。結果を持っている人がさらに結果を出すことは難しいと考えます。視点を変えて新しい結果を求めることができます。

ルカによる福音書12章 「愚かな金持ち」のたとえ

13群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」

14イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」

15そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」

16それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。」

17金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、

18やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、

19こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』

20しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。

21自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

たくさん財産や物を持っていても誰にでも死はおとずれます。人間の価値は持ち物によらず存在そのものにあります。

自分に与えられた時間には限りがあります。最初に多く稼ぎ、十分に貯めてから使おうとするのは良いとは限らないと考えます。生きるために今必要な分がいつもあることが望ましいと考えます。

需要を喚起することはビジネスにおいては重要かもしれませんが、次々に欲求が充足されていくということは不足も多いということです。二番目、三番目、・・・の欲求を満たしている間にいつの間にか時が流れていることも考えられます。

本当に大切なことはそれほど多くないかもしれません。最も大切なことをしなければなりません。

マルコによる福音書10章

29イエスは言われた。「はっきり言うておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、

30今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。

31しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」

父母は敬わなければなりません。家、兄弟、姉妹、子供、畑は大切です。しかし、福音書の教えを優先させれば、家族との関係もさらに良くなると考えます。

マルコによる福音書10章

38イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」

自分が栄光だと思っていることが全く逆であることがあるかもしれません。願っていないものまで得ようとしてしまうこともあり得ます。ここでは弟子たちが栄光の意味を正しく理解していないかもしれません。

マルコによる福音書10章

42そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。

43しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、

44いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。

45人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

一番になったということは、それだけで十分ではなくその時からすべての人に仕えなければならない使命を背負ったことでもあると考えます。仕えるために学ぶことが重要です。

学問の内容を重要なものにするためには、何の役に立つかを意識する必要があります。究極的には神のために学ぶことが望ましいと考えます。その積み重ねがそれぞれの学問の垣根を取り払うこともあると考えます。

ヨハネによる福音書 8 章

23イエスは彼らに言われた。「あなたたちは下のものに属しているが、わたしは上のものに属している。あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない。

常識は大切です。しかし、わたしたちの常識のみにとらわれない外部からの評価が必要な時もあります。

マルコによる福音書10章 盲人バルティマイをいやす (マタ20 29-34、ルカ18 35-43)

46一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人が道端に座って物乞いをしていた。

47ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしたちを憐れんでください」と言い始めた。

48多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。

49イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」

50盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。

51イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。

52そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、

なお道を進まれるイエスに従った。

実際に盲人の目が見えるようになったとは考えられません。しかし、憐れんでくださるよう頼んだ人が救われています。人々が叱りつけ黙らせようとしてもますます救いを求めた人が救われています。してほしいことをしてもらえらる人に熱心に伝えることから救いが始まります。遠慮せず訴えなければならぬことがあります。

実際に目が見えるようになるとは考えられませんが、叱りつけ黙らせようとされるより憐れんでもらうことでその人は救われると考えます。

金持ちになることが最高の結果ではないかもしれません。結果を考えず必死になれば、良い結果が得られるかもしれません。その過程が望ましいとも考えられます。必死の願いから転換が起こります。いま最も大切なことを考えなければなりません。祈りは、ひたむきに必死になることでもあると考えます。

マルコによる福音書11章 いちじくの木を呪う (マタ21 18-19)

12翌日、一行がベタニアを出るとき、イエスは空腹を覚えられた。

13そこで、葉の茂ったいちじくの木を遠くから見て、実がなっていないかと近寄られたが、葉のほかは何もなかった。いちじくの季節ではなかったからである。

14イエスはその木に向かって、「今から後いつまでも、お前から実を食べる者がないように」と言われた。弟子たちはこれを聞いていた。

神殿から商人を追い出す (マタ21 12-17、ルカ19 45-48、ヨハ2 13-22)

15それから、一行はエルサレムに来た。イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を追い出し始め、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。

16また、境内を通って物を運ぶこともお許しにならなかった。

17そして、人々に教えて言われた。「こう書いてあるではないか。

『わたしの家は、すべての国の人の

祈りの家と呼ばれるべきである。』

ところが、あなたたちは

それを強盗の巣にしてしまった。』

18祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、イエスをどのようにして殺そうかと謀った。群衆が皆その教えに打たれていたため、彼らはイエスを恐れたからである。

19夕方になると、イエスは弟子たちと都の外に出て行かれた。

枯れたいちじくの木のご教訓 (マタ21 20-22)

20翌朝早く、一行は通りがかりに、あのいちじくの木が根元から枯れているのを見た。

21そこで、ペトロは思い出してイエスに言った。「先生、御覧ください。あなたが呪われたいちじくの木が、枯れています。」

22そこで、イエスは言われた。「神を信じなさい。

23はっきり言うておく。だれでもこの山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言ひ、少しも疑わず、自分の

言うとおりにになると信じるならば、そのとおりになる。

24だから、言うておく。祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。

25また、立って祈るとき、だれかに対して何か恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい。そうすれば、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちを赦してくださる。」

神殿の境内は売り買いをするには適切な場所ではありません。祈りの妨げになります。そのような場合は転換しなければなりません。祈るべき時と場所では祈るべきです。ビジネスをするのにも適切な場所と時があります。わたしたちはビジネスだけで幸せになることができるわけではありません。

「『立ち上がって、海に飛び込め』と言い、少しも疑わず、自分の言うとおりにになると信じるならば、そのとおりになる。」のならば、いちじくの実がなる季節を待つこともできると考えられます。しかし、もう待てないという時があります。人生は二度と戻ってこない瞬間の積み重ねです。形式だけで実りが無いものを従来のやり方で充実させようとするより違うことをする必要がある場合があります。古さが新しい道をふさぐこともあり得ます。その時にしかできないことがその時にすべきことです。もうすぐ亡くなる人がビジネスのことだけを考えられません。イエスはギリギリの境遇に自分を置いています。

祈り求めるものは既に得られたことを前提に行動することが重要かもしれません。もう望みが叶っている場合もあるかもしれませんし、祈り求めますと得られる方に向けた働きかけをします。困難を排し目的達成しようと考えます。ここではビジネスと祈りが反対のこととして捉えられています。ビジネスとそれを支えることをすることが必要であると考えます。

財やサービスの質を向上させることによって物価を維持あるいは上昇させることが望ましい場合があると考えます。売り買い以外でも良くなることを考え行うことが重要です。

22節から24節は、祈り求めるものは言葉にし、すべて既に得られたと過去形で信じなさいという内容です。信じた人がグッドアクションを取るようになることも考えられます。達成できたことを前提に今の行動を決める生き方も考えられます。祈り求めるものはその時足りないと思うことでもあります。祈り求めることを明確にすることは重要です。それを既に得られたと考えることによって不満や心配がなくなり心のバランスが保たれ次の一步を健全に踏み出すことができることも考えられます。また、祈り求めるものは既に得られたと見え、先に進むことが必要であることもあると考えます。祈り求めるものはこの教えのことかもしれません。

一瞬一瞬を目的として生きることも考えられます。

マルコによる福音書11章 権威についての問答 (マタ21 23-27、ルカ20 1-8)

27一行はまたエルサレムに来た。イエスが神殿の境内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちがやって来て、

28言った。「何の権威で、このようなことをしているのか。だれが、そうする権威を与えたのか。」

29イエスは言われた。「では、一つ尋ねるから、それに答えなさい。そうしたら、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。

30ヨハネの洗礼は天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。答えなさい。」

31彼らは論じ合った。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。

32しかし、『人からのものだ』と言えば……。」彼らは群衆が怖かった。皆が、ヨハネは本当に預言者だと思ってい

たからである。

33そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。すると、イエスは言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

二者択一の結論や結果を出してはいけない場合があると考えます。

「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。しかし、『人からのものだ』と言えば……。」という議論は否定的です。「分からない」と答えますと、思考過程も議論もなかったように採られる可能性があります。どちらも肯定的に考え議論することが必要であると考えます。

「人からのものでもあり、天からのものでもある」と肯定的に考えるのが望ましいと考えます。

マルコによる福音書12章

10聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石、
これが隅の親石となった。』

何か目的を持って行動するとき、必要な物と不必要な物が出てきます。しかしそれは永遠にどのような場合にも必要と不必要が固定して決まっているわけではありません。ある人がある時点、ある場所で不必要と定めても他の場所や他の時に他の人にとっては役に立つことがあると考えます。また、これが成功だという概念も完全に決まっているとは限りません。

マルコによる福音書12章

17イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは、イエスの答えに驚き入った。

皇帝の方が偉いか神の方が偉いかの二者択一ではないようです。両立可能であると考えます。皇帝に支払う税金は、皇帝のものでもあり、神のものでもあると考えます。

民間の貨幣は民間の所有物でもあり、国のものでもあり、神のものでもあるという考え方も必要かもしれません。

マルコによる福音書12章

26死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。

27神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている。」

『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』と過去形になっていません。過去に何かをした、何かであったというだけでなく、現在できることをしなければなりません。

福音書の教えは生きている人のためのものであると考えます。

マルコによる福音書12章 ダビデの子についての問答 (マタ22 41-46、ルカ20 41-44)

35イエスは神殿の境内で教えていたとき、こう言われた。「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。

36ダビデ自身が聖霊を受けて言っている。

『主は、わたしの主にお告げになった。

「わたしの右の座に着きなさい。

わたしがあなたの敵を

あなたの足もとに屈服させるときまで」と。』

37このようにダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。

イエスは祖先にダビデを持ちますが、ダビデのように政治や武力で世の中を治めたものではありません。愛を持って人々と接したのです。

マルコによる福音書12章 律法学者を非難する (マタ23 1-36、ルカ20 45-47)

38イエスは教えの中でこう言われた。「律法学者に気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ることや、広場で挨拶されること、

39会堂では上席、宴会では上座に座ることを望み、

40また、やもめの家を食べ物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

きまりを守っていても見せかけの祈りや仕事をしているだけでは効果は少ないとえます。

マルコによる福音書12章 やもめの献金 (ルカ21 1-4)

41イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入っていた。

42ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。

43イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきりしておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。

44皆は有り余る中から入れたが、この人は、貧しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

有り余る財産の中から多額を賽銭箱に入れた金持ちより貧しい中から自分の生活費すべてを入れた人の方がたくさん入れたようなものであるという話です。

たとえ少額であっても自分の命を養う生活費すべてを入れる心を、多額でも余っているものを献金することより高く評価されているとえます。わたしたちの間でもこのようなことが喜ばれることがあります。貧者の一灯です。

マルコによる福音書13章 神殿の崩壊を予告する (マタ24 1-2、ルカ21 5-6)

1 イエスが神殿の境内を出て行かれるとき、弟子の一人が言った。「先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」

2 イエスは言われた。「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。」

終末の徴 (マタ24 3-14、ルカ21 7-19)

3 イエスがオリーブ山で神殿の方を向いて座っておられると、ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかに尋ねた。

4 「おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、そのことがすべて実現するときには、どんな徴があるのですか。」

5 イエスは話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。

6 わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。

7 戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。

8 民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである。

9 あなたがたは自分のことに気をつけていなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる。また、わたしのために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。

10 しかし、まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられねばならない。

11 引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。

12 兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。

13 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」

実際に世の終わりが来るとは考えられませんが、栄えた物が衰退する時は来ます。何かをやっている切りや終わりになる時が来ます。大発展が衰退に繋がることもあると考えます。今までのやり方ではうまくいかなくなる時が来るかもしれません。利潤が減ってしまうことがあるかもしれません。

しかし、救いの言葉は減びません。まず、福音をあらゆる民に宣べ伝えなければならないと考えます。まだできることを見極めなければなりません。次に繋がります。

マルコによる福音書13章

14 「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら——読者は悟れ——、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。

「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つ」ことが大きな苦難であるようです。

マルコによる福音書13章 人の子が来る (マタ24 29-31、ルカ21 25-28)

24「それらの日には、このような苦難の後、

太陽は暗くなり、

月は光を放たず、

25星は空から落ち、

天体は揺り動かされる。

26そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。

27そのとき、人の子は、天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」

実際に太陽が暗くなったり、月が光を放たなくなったり、星が空から落ちたり、天体が揺り動かされたり、人が雲に乗って来るとは考えられません。

苦難のどん底の後、良くなる兆しが生じると考えます。窮すれば通ずようです。

マルコによる福音書14章

3 イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。

現代ではこのようなことはしないかもしれませんが、しかし、油も自然の産物であることを確認し、高価なものを手放し投資しますと経済がうまく循環し良くなることもあります。いつでもできることをするより今しかできないことをできるかぎりにするべきです。今しかできない投資や奉仕をする価値は非常に高いと考えます。

マルコによる福音書14章

30 イエスは言われた。「はっきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」

31 ペトロは力を込めて言い張った。「たとえ、御一緒に死ななければならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

他人は逃げるが、自分だけは決して逃げないことは実現しませんでした。イエスが最高法院で裁判を受けた後、ペトロも「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と言いました。

自分のことに関しても先のことはわからないことが多くあります。強く主張しない方が良い場合があります。先のことを誓わない方が良い場合があります。

マルコによる福音書14章

38 誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」

わたしたちにも平気でいてはいけないこともあります。

マルコによる福音書14章

50弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。

人は苦しみ、悲しみ、つまずきを避けようとします。立ち向かっていく方が良い場合があります。稼ぐことができているということは他の存在が基盤を作ってくれているからであると考えます。

マルコによる福音書15章 ピラトから尋問される (マタ27 1-2、11-14、ルカ23 1-5、ヨハ18 28-38)

1夜が明けるとすぐ、祭司長たちは、長老や律法学者たちと共に、つまり最高法院全体で相談した後、イエスを縛って引いて行き、ピラトに渡した。

2ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と答えられた。

3そこで祭司長たちが、いろいろとイエスを訴えた。

4ピラトが再び尋問した。「何も答えないのか。彼らがあのようにお前を訴えているのに。」

5しかし、イエスがもはや何もお答えにならなかったため、ピラトは不思議に思った。

ある人が言っていること、評価していることが絶対ではないことがあると考えます。

理由もなくまた悪くないのに訴えられますと普通は反論します。しかし、イエスは反論せず黙っています。後に理解してくれる人々が現れます。

マルコによる福音書15章

13群衆はまた叫んだ。「十字架につけろ。」

イエスは悪くありません。群集心理は怖いものです。正しいことでも他人と違うことを言いますと仲間外れにされることがあります。

人を十字架に付ける人が偉いではありません。

マルコによる福音書15章

25イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。

マルコによる福音書15章

34三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

マルコによる福音書 15章

39百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

イエスも人間です。本当は生きたいのだと思います。祈りの時には嘆きの時もあると考えます。しかし、最期の

時まで自分を救おうとしませんでした。後進に道を付け、成長を望むことができる人が最期の時の勝利者です。

このストーリーにおいて、次の箇所ではイエスが復活するためには、十字架についている段階が必要でした。わたしたちには我慢しなければならないときがあります。祈る段階も必要です。イエスの十字架上の苦しみと死を覚えますと、祈り忍耐する力を与えられます。

マルコによる福音書16章

6 若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。

7 さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。』

亡くなった人が実際に生き返るとは考えられませんし教えられません。そのように思うことは大切です。ですから、物事を現実のみで考えますと、亡くなった人は復活しないという心境だけで生きることになります。現実的に考えることは重要です。命は大切にしなければなりません。しかし、この箇所は、亡くなった人が復活する前のような心境でのみ物事を考えることに変化を与える効果があると考えます。人は絶望的な状況でも生き続けなければなりません。終わりだと思っても今できることをしなければなりません。断絶があっても新しい環境が広がることを信じて生きますと、現状を受け入れ次の一步を前向きに踏み出す勇気が湧きます。断絶は悲しみを伴います。古い方に執着することがあります。人は既得権を失いたくありません。しかし、消滅するだけではありません。新たな形で生き始めます。自然界もそのようになっています。古さにしがみつくのではなく新しい生き方をすべき時があります。失うものがあるけれども得もあると考えられるようになります。結果を持っているから次の結果が出ないこともあります。自分を守ろうとするだけでは真の改革にならないこともあります。イエスの死によって様々な習慣、文化などが開花し今日に至っています。長い目で見ますと、すぐに出ている結果は良いとは言えないかもしれませんが、悪いと思っていることが良い方に繋がることもあります。わたしたちの思い込みは正反対である可能性があります。イエスは亡くなってもわたしたちに一つの判断力を与え続けています。

独占利潤が存在しますとそれを獲得することを目標にしがちです。その時の収支や今出ている結果だけに注目することがあります。それも重要です。利潤が出なくなると困りますが、転換できる機会になります。

死と復活から学べることの一つは、ビジネス学などを違った形に変えて生かすことです。経済学も時代と共に変わらなければなりません。古さを捨てなければならぬ痛みがある場合もありますが、それによって道は開けると信じます。学部が多数あることを前提に学問をできないことがあります。学問を分けていくことの反対は一つにしていくことです。これしかないという教育研究をすることが必要です。一つの学問が改善され、そのことによって社会がどのように変革されていくと期待できるかに注目すべきです。経済学部はここではなくりましたが、そのことによってわたしたちには悔い改める機会が今ここで生まれています。経済学はこういうものであるという固定観念から解放され新しくする機会が生まれています。大切な転換点です。愛と信仰に基づいて行動する性質も加えることができます。学問の様々な垣根を取り払って考えてみるができるようになります。そして聖書は人が悔い改めることをこそ求め評価しています。それが人間教育においても大切なことの一つであると考えます。

祈りは、人間の限界の力を超える働きを信頼することです。どうして良いかわからない時の過ごし方かもしれません。既にあるものに感謝しそれを確認することでもあります。判断を保留することでもあります。じっともちこ

たえることでもあります。何もしない方がましの場合もあります。何かを見ることは一部分を見ることです。一部分を見ることによって、視界から消える部分ができます。見えるという結果を持つことによって見えなくなることもしばしば生じます。手を合わせることによって自分たちで頑張れない姿勢が、目を閉じることによって見えない所の幸せまで追求する姿勢が生まれます。見えない所や未来は見える範囲だけで考えても明確にはなりません。信じ祈るしかない場合があります。自分が求めたものは得られなかったのに、後に自分や全体の効用が高まっていることがあるかもしれません。

自分が成功したのは先祖のお陰でもあることを確認し、次世代へ引き継ぐことを、祈りを通して意識できます。多くの代を経て結果が出ると考えます。後進に道を付けることは経済の課題でもあり人間教育の課題でもあります。

ペトロは悔い改めの機会を与えられています。失敗した後に修正することが大切でそれを支えることや敗者が復活できることも社会の発展に繋がると考えます。

しばらくじっと祈りそこから勉強や仕事を始めますと、落ち着き静粛になります。自分を押し殺しているはずなのに、最も望ましい環境が新しく広がります。

マルコによる福音書16章

15それから、イエスは言われた。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。

16信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。

17信じる者には次のようなしるしが伴う。彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語る。

イエスの教えを受け入れた人は、人を良い方へ導き、新しく望ましい言葉を語ると考えます。

いつも世界中の平和を祈ります。

<参考文献>

朝日カルチャーシリーズ『CDブック心の法話8 東大寺・北河原公敬』朝日新聞出版2011年

いのちのことば社出版部翻訳『BIBLEnaviデイポーションナル聖書注解』いのちのことば社2014年

井堀利宏『マクロ経済学』ナツメ社2002年

斉藤英喜 暮らしの中の仏教語(88) 龍宮城 mārga 第88号 佛教大学宗教教育センター 平成25年3月14日

新日本聖書刊行会翻訳『聖書 新改訳』いのちのことば社1970年

新村出編『広辞苑第六版』岩波書店2008年

友松圓諦『法句経講義』講談社学術文庫1981年

友松圓諦『法句経』講談社学術文庫1985年

日経おとなのOFF 9 September 2013 No.147 仏教に親しむ日経BP社2013年

日本聖書協会『聖書 BIBLE 和英対照 和文／新共同訳 英文／Today's English Version』2008年

日本聖書協会『聖書 新共同訳』2009年

林忠良『<生かされ>つつ<生きる>—よく生きる知恵：断章98—』関西学院大学出版会2013年

ミニブックシリーズ『中国の名言集』リベラル社2006年5月26日 再版

渡辺勝弘『新約聖書講解シリーズ [2] マルコの福音書』イムマヌエル総合伝道団出版局1992年

ここまで導いてくださいました神に感謝いたします。